季刊

直江の津



●直江津経済文化研究会●

春号
3,4,5月

年間特集

直江津を掘る

1 福永家文書から
幕末明治の直江津の
町並みを復元する

2 掘ったら何が見えるか直江津
中世都市・越後府中・直江の津

●●●特別寄稿●●●

老いるとは
——心理学的立場から

知の楽しみ

水族館になにを見るか

フリースペース

茶人宗次という人
石痩庵主

ミニ特集

春を呼ぶ祭り三昧

直江の津 第一号 春号
二〇〇一―三・四・五

年間特集

直江津を掘る

1 福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する 浅倉有子 6
2 掘ったら何が見えるか直江津 中世都市・越後府中・直江の津 小島幸雄 12
知の楽み 水族館に何を見るか 中村幸弘 16
特別寄稿 老いるとは 心理学的立場から 高嶋正士 19
ミニ特集 春を呼ぶ祭り三昧 22
フリースペース 石痩庵主茶人宗次という人 平丸誠 24
東西海陸 27
「奥の細道 路上観察」 28
読書びと 『夢の途上』ラフカディオ・ハーンの生涯／工藤美代子著 29
見る目 神饌箱 30

表紙筆文字は「福永家文書」より

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

斎京　稔（直江津信用金庫理事長）

本誌は直江津信金倶楽部の協力を得て、直江津経済文化研究会が発刊するもので、当面は季刊とし、佐藤和夫を主幹としている。



●年間特集
直江津を掘る

直江津とは何か？
直江津の経済・文化とは？
直江津の歴史とは？
直江津のかたちとは？
直江津の未来とは？
考えてみたい
直江津を

■今号は、直江津が最もにぎわったと思われる幕末・明治時代の町並みと、さかのぼって中世の都市景観を見たい。従来の歴史の見方とは逆に、新しい時代を先に置いたのは、新しい層の下に古いものが埋まっているという考え方にしたがって、想像可能な時代を先に見てから、その下に埋まっているものを見ようとした為である。



年間特集「直江津を掘る」その1

福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する

浅倉有子（あさくらゆうこ）



大正5年11月3日の新町通り

表1　直江津の戸数と人口の変化

年　代	戸　数	男　性	女　性	総人口
延宝9年 (1681)	612軒	1,564人	1,373人	2,937人
延享3年 (1746)	830軒	1,910人	1,694人	3,604人
天保4年 (1833)	1,260軒	2,749人	2,899人	5,648人

出典　延宝9年「高田城請取諸事覚書」、『直江津町史』
延享3年「頸城郡直江津今町村鑑帳」、『新潟県史』資料編
天保4年「今町戸口調」、『直江津町史』

一　江戸時代の直江津

江戸時代の直江津は、およそ一〇の町で構成されていました。新町、川端町、中町、中島町、片原町、横町、寄町、本砂山町、裏砂山町、坂井町の一〇町です。一九世紀前半の文化年間には、さらに新川端町と新坂井町の二つの町が成立しました。表1に示したように、延宝九年（一六八一）のデータによると、これらの町々の総戸数は六一二軒で、男性一、五六四人、女性一、三七三人のあわせて二、九三七人が住んでいました。その後延享三年（一七四六）には戸数が八三〇軒に増え、人口も三、六〇四人になりました。さらに天保四年（一八三三）には、一、二六〇軒と延宝九年の約二倍まで戸数が増加し、人口も五、六四八人と一七世紀後半のほぼ二倍になっています。江戸時代を通じて、直江津が発展してきた様子をうかがうことができます。

中町、川端町のように、直江津を構成する町々は、いずれも「町」と称されていましたが、行政的には村として扱われていました。そのため、天和三年（一七八三）に、幕府の命令によって、旧松平光長領の村々に対して一斉に行われた土地の調査（一般に天和検地といいます）が、直江津の町々でも実施されました。直江津の土地の多くは屋敷地ですが、畑等の耕地も含まれていました。これらの屋敷地や耕地にも、他の村と同様に年貢が課せられました。天和検地帳は、直江津の土地の基本台帳として、江戸時代を通じて利用されました。

村として扱われたため、直江津には、大肝煎という役職が置かれていました。大肝煎は、いくつかの村をあわせた組ごとにおかれた役職で、各村の庄屋のうち有力なものが任命されました。いわば広域的な行政の一部を担ったのです。直江津には、常時一、二名の大肝煎が置かれていましたが、そのうちの一軒が新町に住む福永家でした。福永家には大肝煎という役目に関わる書類や私的な文書など、一万点以上の古文書が残されています。全体として福永家文書とよばれるこれらの古文書は、江戸時代の直江津やそこに生きる人々の姿を現在に伝えてくれる、貴重な文化財となっています。

二　直江津の町並み

図1は、天和検地帳をもとに描かれた新町の土地の図面です（「御水帳引合絵図」、福永家文書）。表通りに面して、短冊状に屋敷地が区画されていることがわかります。それぞれの屋敷地の表通りに面した横の辺を間口、縦の辺を奥行き、または裏行きと呼びます。新

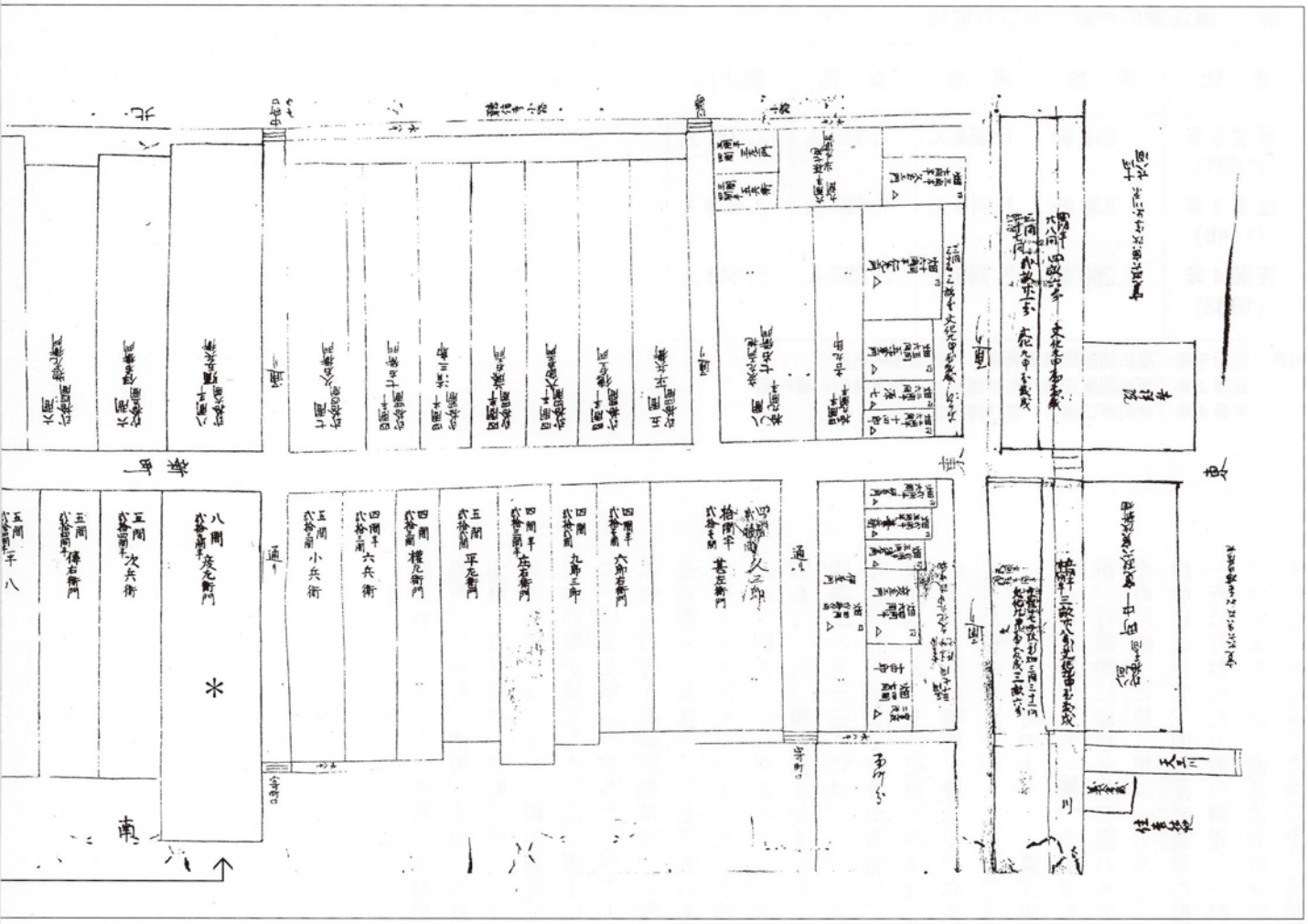


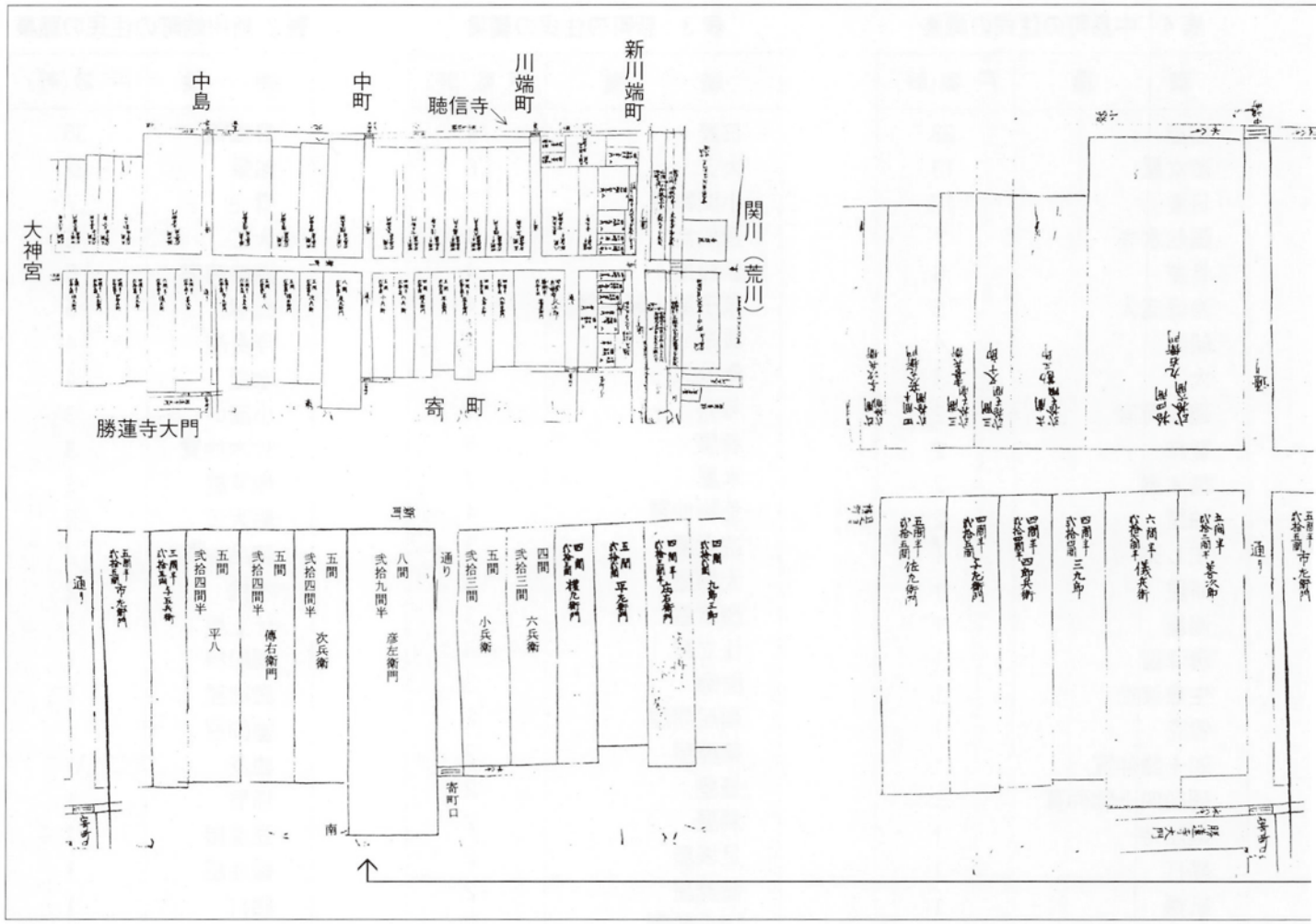
図 1

町の場合、間口が四間（一間の長さは約一・八メートル）から六間程度、奥行きが二一間ないし二五間程度の屋敷地が多いようですが、なかには「九右衛門」の屋敷地のように、間口一四間、奥行き二六間、面積にして三六四坪の屋敷地を所持していた人もいました。図1のうち＊を付した「彦左衛門」の屋敷地が、福永家の所持地です。

図1に示したような町ごとの住宅地図が一斉に作成されたのは、幕末の慶応二年（一八六六）になってからです。しかし、そこに示されたデータは、前述のように天和三年のものです。新しく開発された新川端町と新片原町以外については、天和三年以降、基本的に土地の一斉調査が行われませんでした。そのため天和の検地帳が、土地に関わる基本帳簿として使われ続けたのです。この幕末に作成された絵図を持って現在の直江津の町を歩いてみると、基本的な土地の区画が変化していない箇所があることがわかります。一七世紀後半の土地調査と、それに基づく幕末の絵図が、現在の直江津を知る上でも有効な資料であることは、驚きに値します。

しかし、それぞれの屋敷地は、実際にはいくつかに細分化されて利用されることが多かったようです。直江津の人口が拡大するにつれて、その傾向は強まったと考えられます。図1には合計で四二軒分の屋敷地が示されていますが、明治三年（一八七〇）の新町の戸数は一〇一軒に上ります。このデータからも、屋敷地が細分化されていたことがわかります。

「水帳引合絵図」は、一二町分すべてが残されていますので、江戸時代の直江津の姿を視



覚的に把握できる貴重なデータとなっています。

三　住民の生業

江戸時代の直江津の人々は、どのような方法で生活の糧を得ていたのでしょうか。それをうかがうことができる明治三年の資料があります。「渡世向軒別書上帳（とせいむきのきべつかきあげちょう）」（福永家文書）と題された資料で、一軒ごとの職業が書き上げられている、他に例のない貴重なものです。そのなかから、新川端町の住民についての記録の一部をみましょう。

一、ぬし（塗師）屋　　巳之七
一、船乗　　三吉
一、煙草屋　　三平
一、日雇稼　　みよ

右に示したように、一軒ごとに職業と戸主が書き上げられています。中には「みよ」のように女性の戸主もいますが、江戸時代の都市では農村部に比較して、一般に女性の戸主の割合いが高かったことが知られています。表2は、新川端町について軒数が多い順に職業を示したものです。もっとも多いのが「日雇稼」で三六軒にのぼっています。日雇は、やはり都市部に多い職業で、直江津の場合には、

表 4　中島町の住民の職業

職　　種	戸 数(軒)
揚屋	23
遊女屋	13
日雇	12
廻船水夫	7
肴屋	6
漁場商人	5
船乗	4
大工	3
廻船荷宿	2
髪結	2
鍛冶屋	2
油屋	2
すし売	1
餅屋	1
湯屋	1
唐津屋	1
生魚渡世	1
肴売	1
四十物仲買	1
廻船四十物仲買	1
廻船持	1
綿打	1
紙類	1
畳屋	1
奉公人	1
合　　計	94

表 3　新町の住民の職業

職　　種	戸 数(軒)
日雇	11
大工	6
小間物屋	5
廻船持	4
旅籠屋	4
菓子屋・饅頭屋	4
賃糸	4
奉公人	4
肴売	4
肴屋	3
米屋	3
荒物仲買	4
遊女屋	3
太物屋	3
煙草屋	3
仕立屋	3
医師	3
廻船問屋	2
薬種屋	2
畳屋	2
湯屋	2
足袋屋	2
蕎麦屋	2
川舟船頭	2
飛脚	1
酒造	1
質屋	1
瀬戸物屋	1
船大工	1
揚屋	1
桶屋	1
表具屋	1
下駄屋	1
木挽	1
塗師屋	1
鋳かけ屋	1
綿打	1
豆腐屋	1
中持	1
不明	1
合　計	101

表 2 新川端町の住民の職業

職　種	戸 数(軒)
日雇稼	36
船乗	22
肴売	7
大工	6
廻船荷宿	5
出稼	5
浮身屋	4
米屋	4
小商い	3
竹木仲買	3
煙草屋	2
船大工	2
諸品仲買	2
木挽	2
仕立屋	2
廻船持	1
鍛冶屋	1
塗師屋	1
紺屋	1
桶屋	1
豆腐屋	1
醤油屋	1
綿打	1
鳶	1
髪結	1
座頭	1
不明	2
合　計	118

（明治 3 年 10 月「渡世向軒別書上帳」、福永家文書、より作成）



昭和59年お茶の水女子大学
大学院人間文化研究科修了
お茶の水女子大学助手等を
経て現在上越教育大学教育
学部助教授

湊や船に関わる仕事、冬の雪踏や除雪といった仕事に従事したと思われます。次に多いのが「船乗」で二二軒にのぼっています。また積み荷を取り扱う「廻船荷宿」が五軒、廻船を所有する「廻船持」が一軒、「船大工」が二軒など、新川端町が日本海海運に関わる人々が多く住む町であったことを知ることができます。

次に表3は、新町の住民の職業について示したものです。新町には、天保五年（一八三四）以降、大肝煎や各町の丁頭らの執務所である町会所が置かれていました。したがって、直江津の政治・経済の中心の町であったわけです。表3をみると、「米屋」三軒、「質屋」一軒、「酒造」一軒などがみえますが、これらは他の町ではあまりみられない職業です。また「旅籠屋」四軒、町医者が三軒、薬の材料を取り扱う「薬種屋」二軒、現代の郵便に相当する「飛脚」一軒も同様です。政治・経済の中心の町であったことが、これらの職業からもうかがうことができます。「小間物屋」五軒、綿織物などを扱う「太物屋」三軒など消費財を扱う店や、「菓子屋」（四軒）、「蕎麦屋（二軒）」などもみえます。なお福永家は、酒の醸造を行う酒造業を営んでいました。

最後に表4をみましょう。これは中島町の住民の職業について示したものです。中島町も独自の個性をもった町でした。もっとも多い職業として「揚屋」がみえますが、「揚屋」は客に飲食や遊興をさせる店のことです。中島町は高級な遊び場で、客は「揚屋」で遊女をよぶことができました。中島町には一三軒の「遊女屋」がありました。「遊女屋」とは、遊女を抱える置屋のことです。一九世紀前半の天保年間の記録（富本繁太夫著「筆満可勢」）によると、遊女の花代は、銭九〇〇文であったということです。幕末の慶応元年の銭湯（「湯屋」）の代金が、成人男性で五文、女性が四文であった（「乍恐以横折奉嘆願候」、福永家文書）ことと比較すると、いかに高価であったかがわかります。したがって、羽振りのよい船頭や近隣の富裕な地主などが、客になったと思われます。また、表4に「髪結」二軒、「すし売」一軒、「餅屋」一軒、「湯屋」一軒などがみえるのも、中島町の個性によるものと考えられます。

四　まとめにかえて

江戸時代の直江津は、それぞれが独自の個性を持つ町々の集まりでした。また、そこには、様々な職業に従事しながら、懸命に生きている人々の姿をうかがうことができます。今回紹介することができなかった、中町、横町などの九町に生活していた人々も同様です。

なお、今年度末に、直江津の資料が数多く収められた『上越市史』資料編4・近世一が刊行される予定です。あわせてご覧頂ければ幸いです。

年間特集「直江津を掘る」その2

掘ったら何が見えるか直江津

■中世都市・越後府中・直江の津



小島幸雄（こじまゆきお）



前ページ　守護所あった茶壷
茶匠はこのような茶壷に茶葉を詰めて封印し、大名などに届けました。葉茶は茶臼で挽かれて抹茶として茶席で使われます。
左上　中国元時代の磁器
絵のあるものは染付、ほかは青磁です。こんな凄い焼き物は、直江津が湊を持っていたから出土するのでしょう。
左下　茶道具と儀式の土器
風炉と行灯は茶席の必需品。山積みの皿は、儀式に使われた土器（はじき）で、有力者が「ハレ」の儀式に使ったと考えられています。
■「春日山城跡ものがたり館」で見ることができます。いちど実物をご覧ください。



一　潮の臭い

「直江津も好き」というのは、小生が能生の生まれであることに原因があるようです。日々変わる海岸線の臭いは、味噌汁に海草を浮かしたようなものだったり、時には打上げられた魚の腐臭のようであったり、さてまたさわやかな心が和むものであったりもします。家並みに十数軒ごとに作られた「しょうじ（小路）」を抜けると目前に広がる日本海、そんなロケーションがとても好きで直江津に住んでいます。もう一つ、「五智」という地名も直江津を選んだ理由に挙げられます。「おじ」だったので能生に居なければという思いはなく、イメージにあった直江津に住むことにしたのです。

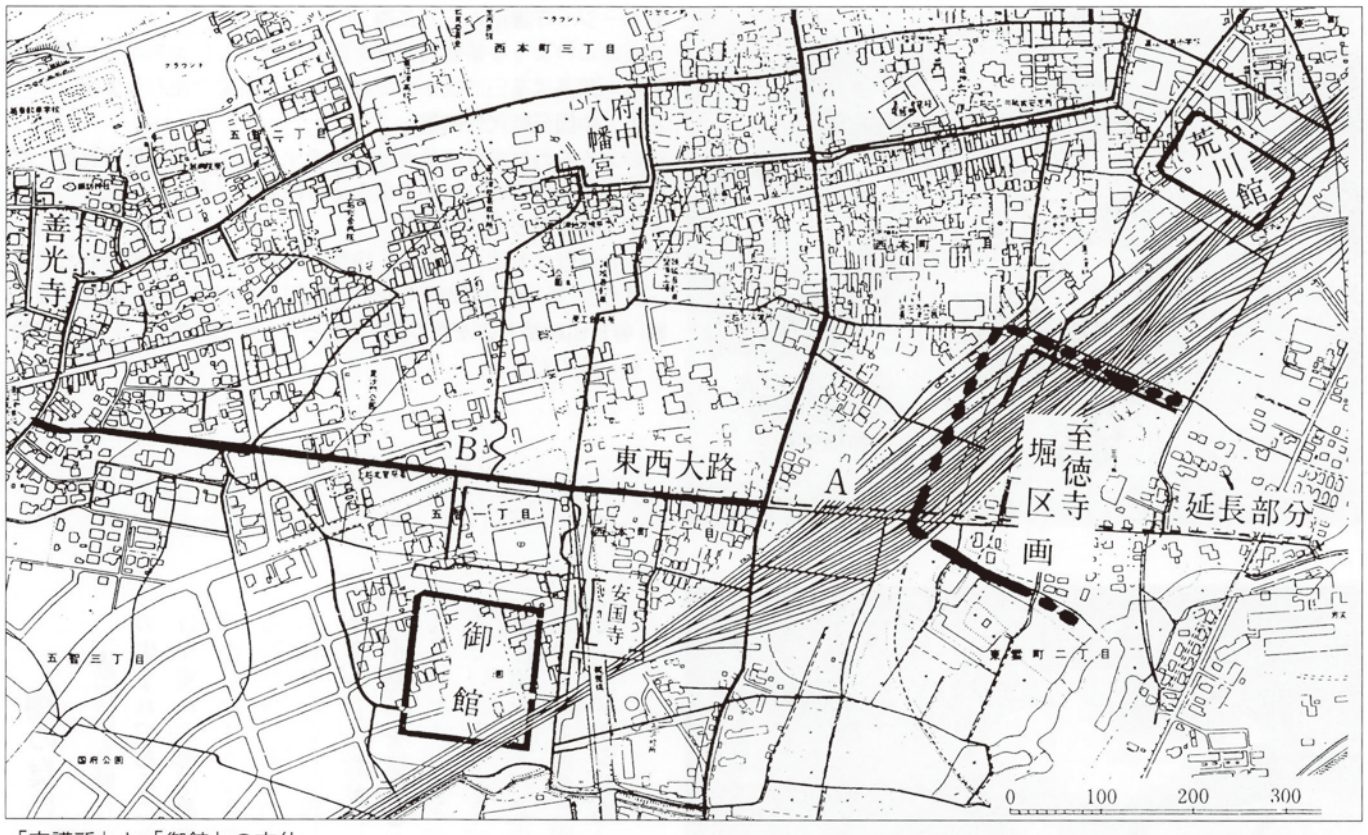
でも、地中からの情報を受け取るまで、こんなに凄い町だったとは思いも寄りませんでした。

二　地中のチャイナミュージアム

「china」を辞書でくくると「陶磁器」という訳が書かれています。中国が世界一の陶磁器生産国であることから、国名が焼き物という国を代表する生産物の代名詞となった例です。因みに「japan」は漆器のことです。なお、先頭の文字を大文字にすると「China」・「Japan」国名になってしまいます。

ここでいう「china-museum」とは、焼き物博物館ということになります。

平成四年、直江津駅南地区土地区画整理事業に伴って発掘調査が行われることになりました。現在の南口駐車場になっている付近を調査中に、火事で焼けた跡のごみ整理をしたような焼き物の「カケラ」がたくさん詰まった穴が発見されました。炭と灰で真っ黒になって地中から掘り出された陶磁器は、発見当初そのまま袋に詰められていました。数日後、陶磁器を洗っていた女性から「見たこともないようなものがあります」という報告が入りました。中国の元の時代に作られた「染付」がみつかったのです。小生も博物館でガラス越しに見たことはありましたが、「カケラ」とはいえ本物を手にしたのは初めてで、なんでこんなものがここにあるのだろうという驚き



「守護所」と「御館」の方位

両者にはズレがあるのは明白です。そして、周辺の道もそれに制約されています。

Aの道は守護所が否定されて後、Bが延長されたのでしょう。

のほうが先に立ってしまいました。凄いものがでたということで発掘調査を手伝っていただいた人を集め、「なんでも拾って洗ってみよう」とお願いしたのを鮮明に記憶しています。

とんでもない珍品が単独で発見されることは「考古学」ではよくあることです。しかし、直江津は違っていました。陶磁器の逸品が次々と出土したのです。「元染付」・「龍泉窯青磁」・「釉裏紅」など、中国製の焼き物でも優品とされるものが複数確認できたのです。もちろん、新潟県では初めてみつかったものですし、十年近く経った今でも北陸では直江津につぐ発見が報告されていないことでも、貴重なものであることが分かっていただけることと思います。

このような逸品がなぜ、直江津で発見されたのでしょうか。

日本史に登場する中世都市は数多くあります。その代表選手は鎌倉・平泉・博多といったところでしょうか。いずれも日本史を飾る都市で、現在は神社仏閣を中心とした観光地となっています。中世には限りませんが、京都も中世都市といってもよいでしょう。これらの「まち」は、政治の表舞台からは姿を消しても寺社がその面影を伝えていました。しかし、直江津は「御館の乱」での戦火と上杉氏の移封が重なり、さらには福島・高田築城があったため、中世越後府中の繁栄を見せていた「至徳寺」・「安国寺」といった禅寺が地中に埋もれてしまい、情報が埋没してしまったのでしょう。

おもしろい傾向があります。黄金の金色堂まで作る財力をもった奥州藤原氏のまち平泉

は、中国製の奢侈品では直江津に勝っていますが、中国製の日常食器で比較すると圧倒的に直江津が優位にたっているということです。量が必要となる日常品を多く所有できたのはなぜか。これが直江津の特質を探るキーワードかも知れません。

三　直江津の都市計画

駅南を掘ってはじめて分かったことがあります。「御館」と「駅南地区（至徳寺）」の軸がずれていたことです。地籍図などから「御館」と「至徳寺」と想定されていた地域はずれがあるが、五智から関川までの道は真っ直ぐだったという説が大勢を占めていました。学会でも広く認知されていたこの説は、発掘調査によって覆され、今では道が「至徳寺」付近で北に迂回したという考えに変更されつつあります。また、「至徳寺」と想定されていた地域で発見された一辺が二六〇メートルもある堀は、「至徳寺」という寺ではなく、越後府中の中心にあった「守護所」とするのが妥当であろうといわれるようになりました。

では、「至徳寺」はどこにいってしまったのでしょうか。これも発掘で分かったことなのですが、「至徳寺」は私たちがイメージするような本堂を中心に建物が配置される寺院ではなく、守護の位牌を安置する「院」の集まった空間を「至徳寺」と呼んでいたんだと想定しています。かつては「至徳寺区」といっていたわけですから、疑うことなく中世の寺跡と考えられていた地域は、まさしく守護の館「守護所」と亡くなった守護の位牌が安置された聖域の両者によって構成されていた、越後府中の核であったと考えてよいでしょう。それが長く伝承されて、至徳寺の名だけが残されていたのではないでしょうか。寺の名のみ残った理由ははっきりしませんが、越後上杉家が断絶した後、謙信と景勝までは越後の領主として維持されたものが、堀氏の福島築城に伴って「否定」の対象となり、守護館としての機能ばかりでなく館の名称すら福島へ移されたのでしょう。福島城二代目城主の松平忠輝の家老大久保長安が、福島城から「府中」と記した文書を出していることでも府中が福島に移動したことが容易に推測できます。

四　埋もれた中世都市

府中が移動したことは、政治都市としての直江津がその機能を停止したことを意味します。それでも、江戸時代を通じて町が機能してきたのは、湊という経済基盤を有していたからにほかなりません。同じ中世都市でも、直江津が府中であったために、平泉とは全く違った時間の経過を想定でき、平安時代後期から江戸時代初期まで連綿として優品の陶磁器が使用され、地中のミュージアムとして今に伝えられたのでしょう。

平安時代後期から中世を通じて一箇所にたくさんの陶磁器を包含する町は全国的に珍しく、東国では直江津のみといってよいでしょう。そして、地中からこれほど多量の中国製陶磁器を提供できるのは、「直江の津」が直接大陸との貿易を行っていたことを示しているのかもしれません。日本海側東西文化の接点として、日本史上の評価を受けている「直江の津」ではありますが、もっと隠された中世の「津」の姿があったのかもしれません。今の直江津港がそうであるように、六〇〇年も七〇〇年も前から今と同じ湊の情景があったのかもしれません。

「越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。……」これは、森鷗外の小説『山椒大夫』の書き出し部分です。説経節までは難解でも、こんな手頃なところから自分の町、「港湾都市直江津」と「越後府中と直江の津」を見つめなおしてみたいものです。



1952年　能生町生れ
1975年　立正大学文学部卒
1977年　上越市教育委員会
　　学芸員

水族館に何を見るか

なかむらゆきひろ
中村 幸弘

水族館の〝水族〟は「水の中に住む動物」と国語辞典では解説されている。「水中に住む珍奇な生き物を飼育し、それを見ることのできる館（やかた）」が水族館の一般的なイメージといえよう。珍しいものを見たいという欲求が、人の本能的な部分とどれほどに関わりがあるのかは分らないが、魚を飼育していたという証拠ならポンペイ、中国、エジプト、バビロニアなどと、数千年の時をさかのぼることができる。人類が文明の早い段階で〝楽しみ〟という範疇で生き物と対峙していたことがうかがえる。

近代における水族館は、西ヨーロッパで十八世紀から十九世紀にかけて起こった博物収集趣味のブームの中で誕生した。趣味の博物か

メガネモチノウオ（通称ナポレオン）



ら博物学へ、そして収集物の整理・展示から博物館へ、さらに標本・剥製の展示から〝生きているもの〟を直に見たいという欲求へ、こうして水族館、動物園、植物園などがつくられてきたに違いない。これらの施設がより人々の知的好奇心を満たすものとして、発展してきたことは疑いのないことであろう。この知的の部分が教育・学習として、好奇心の部分が娯楽として、それぞれに強調されて今日に至っている。我が国ではこの双方を合わせたものとして「面白くて、為になる」という文言が生まれ、とくに水族館や動物園はこのコンセンサスの上に進歩・発展してきた。世界で最初の水族館は一八三〇年にフランスのボルドーに、日本では一八八二年（明治十五年）に上野動物園内につくられた「観魚室（うおのぞき）」であった。そして、当上越市では一九三四年（昭和九年）に最初の水族館が開設されている。

現在の日本の水族館（日本動物園水族館協会加盟園館＝六七）をその設立基盤でみると約半数が民間で、水族館が観光（娯楽）の一つの形態として発展してきたことが分かる。水族館はその設置されている場所のロケーションなどから大まかに都市型と観光地型に分けてみることができる。都市型は社会教育の場として博物館的な面（為になる）を重視するため公立が多く、観光地型は集客を前提とする娯楽面（面白い）を重視するため民間が多いことになる。しかし、公立といっても集客を無視した運営をすることはできないので魅力のある展示は重要なことであり、また民間といっても単に見せ物小屋的な発想の運営では社会教育や動物保護などの問題から社会的評価を得にくくなってきている。この点からは、双方の違いは近年あまり明確ではなくなってきているといえる。この流れは世界的なもので、一九九六年六月に東京（ホスト館　葛西臨海水族園）で開催された第四回世界水族館会議では、世界二十八か国から八〇〇人の水族館関係者が集まり水生生物の飼育・展示技術、教育活動、環境問題と保全戦略などについて論議が行われた。

水族館という〝生きているもの〟を飼育して・展示しているところでは、訪れる人たちに何を伝えたいのか、何を伝えることができるのか、は基本の命題といえる。そして、その意図を伝える相手は多ければ多いほどよいわけで、そのためにいかに魅力ある展示をしてゆくかは重要なことになる。近年は集客力のある魅力的な生き物の多くは希少なものが多く、入手などが難しい状況になってきているが、見せる手法によって新たな魅力を作り出している水族館が現れてきている。例えば、ブロンクス動物園（ニューヨーク）のジャングルワールドのような〝ランドスケープ・エマージョン（臨場感のある展示）〟と呼ばれる手法は、ある特定の生態系をまるごと再現するというもので、一つ一つの生物のアピール度は小さくても、水、陸、植物、動物が一体となって全体としてボリューム度が増し、雰囲気作りの効果に優れている。日本でも動物園ばかりでなく水族館にも取り入れられてきて、海遊館（大阪市）や、ふくしま海洋科学館（いわき市）などにその一端を見ることができる。また、一九八四年にオープンしたモントレー水族館（カリフォルニア）は展示され



上越市立水族博物館
世界最大級の１枚ガラス（アクリル製）を使った
“マリンジャンボ”水槽
水槽の大きさ　幅 13 m×奥行き10.5 m×水深 7.2 m
水　　量　720 ㎥
展示魚類　40 種 2000 匹





上　モントレー水族館の“タッチングプール”ボランティアによる解説が行われている
下　10億年の生命の歴史を見せてくれるクラゲ海水浴でおなじみのミズクラゲ

ている動物にはそれほどに変わったものはいないが、普段見過ごしてしまうようなものであっても、観客に大きな感動を与える展示になっている。そこには自然での生態等を十分に調査・研究した結果が、成果として見事に生かされている。また、この館では二五〇人を超える職員がおり、そのうち子供たちなどの教育を受け持つ専門のスタッフが五〇人もいて様々なカリキュラムを用意していることや、登録のボランティアが八〇〇人もいるなど、単に見せるだけではではない、新しいスタイルの水族館として成功している。このモントレー水族館の運営の仕方は、これからの学校教育の新しい展開や生涯学習社会との関連の中で、水族館が対応してゆくべき一つの方向性を示している。

二十一世紀は、地球が単に人間の利用対象ではなく〝地球共生系〟といわれる、人間と他の全ての生き物との共存・共栄が基本の思想になると言われている。それは「多様な生物が地球上にいる」「それらの生物の相互の関係と同等に人もまたいる」「人が利用する自然（水族）の広い情報を必要とする」「その情報を利用して新しい価値（文化）を見つける」などということであろうか。メダカが身近からいなくなったということは、野生の生物に接する機会が少なくなったことであり、それは生命に接する機会が少なくなったことでもある。様々な生命と出会えることでも水族館や動物園や植物園などは、より有意義な場所になるだろう。自然と共に生きるという視点でみれば、街に暮らす現在の私たちは随分と本来の自然から外れてきている。この現代の文明社会を養老孟司氏は脳が作った社会「脳化＝社会」と呼んだ。しかし人の体は脳も含めて自然そのものという。現代人の直接の祖先である新人が現れたのは二〇万年前というが、わたしたちの肉体はその頃とどれほどの違いがあるというのか。脳の作ってきた社会と体という自然の間に、ギャップは生じないのだろうか。

人は何故に水族館が好きなのか。「お母さんのお腹の中で羊水という海の中にいたから」という見方もある。もっと根源的に、「生命が水の中で発生した」ということによるというものもある。ガラスの内側の水の中を泳ぐ本物の生き物たちとの出会いは、三十六億年の厳しかったけれどゆったりとした本来の生命の流れを、潜在意識の中に思い起こさせてくれるのではないか。水族館がわたしたちにとって、自然から離れた生き物としての痛んだ精神を〝癒す〟ところとして、そして〝生きている〟ことの素晴らしさを確認するところとして、さらに生き物のたちと人類との共生を考える場になれればとおもう。



昭和22年（1947）生
柏崎市出身
東海大学海洋学部海洋資源学科海洋生物学専攻
学芸員
金沢水族館（株）を経て上越市立水族博物館長

【特別寄稿】

老いるとは
●心理学的立場から

高嶋正士（たかしままさし）

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう。
時には二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。
歳を重ねるだけでは、人は老いない。
理想を失うとき初めて老いる。
歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失うときに精神はしぼむ。

（サムエル・ウルマンの『青春』の詩より。傍点は筆者）

老いる（歳をとる）ことは、頭の働きを代表し、また正しい意志活動とは無縁ではない。「歳とともに老いる」、「美しく老いる」というように、歳月の経過が老年期の始期にいくらか影響することはないだろうか。それでも大多数の人はいつか老いるという事実は受容され、また期待されなければならない。しかし、多くの人は「歳はとりたくない」という。ある人は、「歳をとると嫌われる」という。「生老病死」（四苦）は、生きとし生けるものの定めであり、あたり前の事象であるにも拘わらず抵抗を示す。

老人の苦悩は、昔の経験に多くの原因を求めることができる。七十代または八十代において幸福であることを欲する人たちは、早くそれぞれの時代に予め準備することを始めなければならない。賢い人は次の段階に対する用意のために計画することである。

例え、我々はもって生まれた本性を変えることができないとはいっても、我々は自らの特性を伸ばすように心がけることはできるし、未来を享楽することができるような基礎をつくるようにすることも可能である。望むべからずことを願望し、欲求不可能なものをあさり求めることは、いたずらにむさぼることにつながり、老人らしい落ち着きをなくす。そのために必要なことは、その根底をなすものが、年齢的な意味で主張したい頭の働き（英知）であり、意志の統制でもある。

老いる（歳をとる）ことは、人間を非活動的にする。それは静かに慮ることである。静かに慮るところに、よく調整のとれた行動が生まれてくる。本当の知恵（年輪）に磨きをかけることであると思う。

そこに、歳をとる、老いることのいっさいの願望がかかっている。

さて、この世に生を受けたもの等しく、「病老死」は避けることのできない苦しみである。加齢とともに記憶力は減退し、知的活動は一般に衰え、情緒は不安定となり、依存性が強まり、自己中心的、閉鎖的になりやすい。家庭における立場も従的となり、定年あり、経済的独立を失い、対人関係も減少。一方、家族や親類、知友との離別、死別、疎遠、加えて次第に減退する体力を思い、家に引きこもりがちとなり、孤独感や寂寥感が増大し、その結果、精神的不健康に陥り自殺するケースがとくに近年増加の傾向にある。

このことは、老いることによる年寄りらしい生き方に変わる、社会生活、家庭生活の大きな変化に悩まされるからである。

また、老いることによって、人格や性格に硬さがみられ、若い者との調整がむずかしくなってくるのも事実である。そこで、老人の性格の変わり方について分類すると、

①若いときの性格がますます強化する人

几帳面が頑固になる。倹約がケチになる。ノン気が鈍感、粗野になる。短気がさらに短気、粗野になる。

②若いときの性格が反対の方向に変わる人

明るさが無口、陰気になる。人なつっこさが人嫌いになる。浪費家がケチになる。真面目が世俗的好色となる。

③若いときの性格が丸みをおびてくる人
気まじめ、粗野、直情が円満、社交家になる。陰気、口下手が世話好き、社交家になる。

④若いときの性格が中性的になる人
男らしい性格が中性的傾向になる。女らしい性格が中性的傾向になる。温和な物静かな人になるか、反対の人も多い。

このように、性格の変わる人、変わらない人があっても歳をとると、生活環境の変化によって、性格が変容する場合が多い。その最たるものが「怒りっぽくなる」ことではなかろうか。

老年期は自分にかなうものを持ち、「人と人とのつながり」が心の老化を防ぎ、「ふれあい」によって、自己実現をもたらし、人生の幸福と歓喜を味わうときである。

最後に「老いること」の心理的問題についてのべる。

老いは過去の生育史（生き方）と深く結びついていることが多い。したがって、高齢者の理解やケアーにあたっては、生育史をたどることによって、問題解決の糸口や援助方法を見つけることができる。また、老人としての自己受容ができていない場合は、適応上の問題が生じ易いことに注意することである。

高齢者は一般に社会的役割が少なくなっているため、自尊心を保ちにくい状況に置かれている。過去の話を繰り返すことも多いが、それによって自分自身の自尊心を再認識していることが多い。したがって、きちんと耳を傾けることが大切である。場合によっては、看護や介護を受ける立場になったこと自体が自尊心を傷つけている可能性もあることに配慮する必要がある。また、高齢者や患者が示す虚勢的行動や態度の裏側にかくされているもの、寂しさや孤独感のあることを見逃してはならない。

美空ひばりさんの『悲しい酒』の中にでてくる「一人ぼっちが好きだよと　言った心の裏で泣く」の心理は、高齢者、患者、失恋者などに共通するものがある。歳をとったら大いに腹から笑い、おたがいにワイワイ語りあうことに努めるべきである。

今日、物の豊かさが招いた裏側の一つの問題点として、家族同士の笑いやワイワイいうコミュニケーションの場がなく、報連相病に悩み苦しんでいる人々が多いのではないか。



大正14年(1925)生れ
吉川町竹直　真照寺住職
共立女子大学名誉教授
(臨床心理学専攻)
文学博士
長岡西病院心療内科（非常勤）

ミニ特集

祭り三昧

日光寺けんか祭り

神と仏ががっぷり四つ





4月18日　糸魚川市・下早川谷

真言宗日光寺の法要と白山神社の春祭りが同時に行われる神仏習合の祭り。観音堂での法要の間、境内で激しく神輿がぶつかり合う。舞台では太鼓の奉納の後、僧侶によって散華が行われる。

上　本気でぶつかり合うので、壊れた神輿の部品を拾う担当もいる

左　鐘の合図で、日光寺から僧侶が、山上の白山神社からは二基の神輿が下って観音堂へ

春日神社春祭り

春日山城跡を背に春を満喫





4月22日　春日山下

春の日を浴びて春日山を背に神輿と4地区の山車（だし）が田園を行くのは、のどかな風景である。神輿は町内送りではなく最後まで担ぐので、夕闇せまるころ社殿前で神輿を旋回させる若者達の顔は凄絶な感じさえある。

上　春日山を背景に、春日、大豆、中門前、谷愛宕の山車

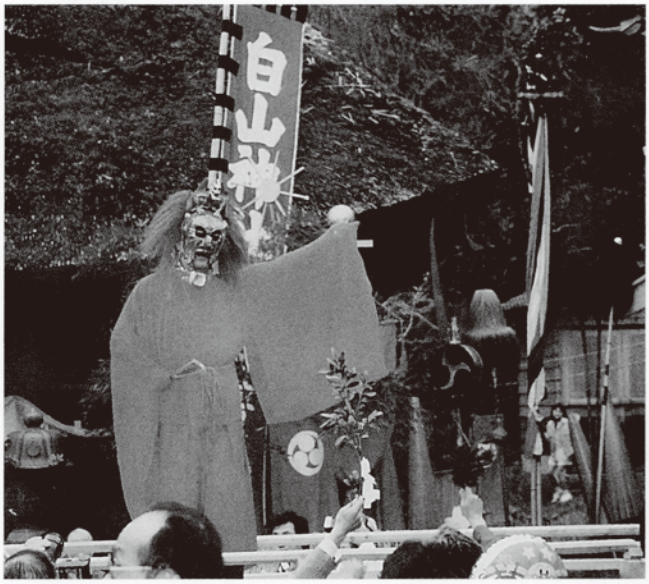
左　田植を待つ田の畦道を行く

くびきの 春を呼ぶ

春は祭り、光り輝く芽生え、生きるよろこび……

白山神社春祭り

神人交歓、春の一日を遊ぶ





4月24日　能生町

なんといってもこの祭りのメインは、境内の池に舞台を組み奉納される11曲の舞楽（国指定文化財）。人々は境内を見下ろす桟敷で神と酒食を共にして見物する。一時間近くを一人で舞い続けた陵王が、一部がとりはずされた橋懸りを跳び越える「走り込み」の瞬間、境内はまさに興奮の坩堝と化す。

上　夕日を受けて舞う陵王は見る人を感動させずにはおかない

右　精進潔斎して神に仕える稚児の舞は気品がただよう

五智の祭り

春爛漫、八重桜の下を神輿が行く





5月5日　五智国分寺

4日午後、白山神社から御神体が氏子によって山を下り、国分寺境内の御旅所に移る。5日は朝から町内を神輿が巡り、八重桜の咲く山門をくぐって還御。国分寺の本堂を神輿が3回廻る間、住職と神主が挨拶を交す。

上　本堂・親鸞聖人・神輿が一つの空間を創造する

右　白山神社の坂を御神体が行く

石瘦庵主 茶人宗次という人

ひらまる まこと
平丸 誠



荻野宗次

宗次とは明治に生まれ大正、昭和、平成と激動の時代九十七年を直江津の経済人、文化人として活躍した故荻野惣次郎の茶人としての雅号であり、石瘦庵とは荻野が心を傾けて造り大切にした茶室のことである。

経済人としての荻野については、直江津駅前いかや旅館（現 ホテルセンチュリーイカヤ）の主人ということで、既にその業績等も多く語られている。

文化人としての荻野は、茶道界、特に新潟県における表千家流茶の湯の普及活動において特筆すべき業績を残している。

荻野は「旅館業と言う職業がら、客をもてなすことは茶の心に通ずる」として、接客精神を茶の湯に学んだ。茶の湯を志したのは弟の勧めによるものでもあった。

大正二年二十一歳の荻野は、当時高田関町（南本町二）で不白流を指導していた家元格三上宗心（宇一郎）に入門し指導を受けた。

高田の茶の湯は、明治維新により高田へ下向した榊原藩主榊原政敬の茶頭を努めた二代目荒井宗二によって、江戸千家浜町不白の流れを汲む茶の湯が伝えられたものである。

宗心の家元格という言葉は、荒井宗二が師とした江戸千家浜町派の家元が明治の終わり頃に廃業したため、宗二とその門人達は指導をうける家元が無くなってしまった。しかし、宗二を家元とすることもできず、けれども技術の指導をしたり、免許を交付することの出来る人が必要であったため、高田の茶の湯者達が苦心の末考え出したのがこの家元格という方策であるが、このことは後に、家元が無いことにより、『高田だけの不白流』と言われる所以である。

宗心が大正八年に亡くなった後、宗次は家元格を承継した清水宗観の指導を受け、茶道に精進し、昭和十九年宗観の後継者として不白流家元格を引き継ぎ、いかや旅館での弟子の指導に当たるのである。宗次は何時の頃からか家元の無い「高田だけの不白流」を辞退しようと考え、家元格を高田の三上ハツに引き継ぎ、昭和三十七年表千家第十三代家元即

中斎宗匠を頼って入門するのである。入門に際し即中斎宗匠は、新潟県に表千家の支部がないことから同門会設立を強く要請した。

宗次は当時高田で表千家の指導をしていた吉田喜代子（宗喜）夫の貞治（宗石）と相談のうえ支部結成のための行動を開始した。

■表千家同門会新潟県支部発会に貢献

発会式は昭和三十八年七月七日高田やすねに於いて盛大に開催された。

発会した新潟県支部は従来北陸支部の一地区であったが、長野県支部に続いて独立発会したのである。北陸支部当時は県下で十数名しか入会者がいなかったが、荻野達の勧めに応じ支部独立に際しては多くの入会があった。

発会式には本部から表千家第十三代家元即中斎宗匠をはじめ、岑一朗氏、吉田堯文氏、山下悦男氏の両幹事、本県出身の神奈川県支部長市島成一氏、北陸支部、長野県支部の役員等関係者三百二十余名が参加し盛会であった。

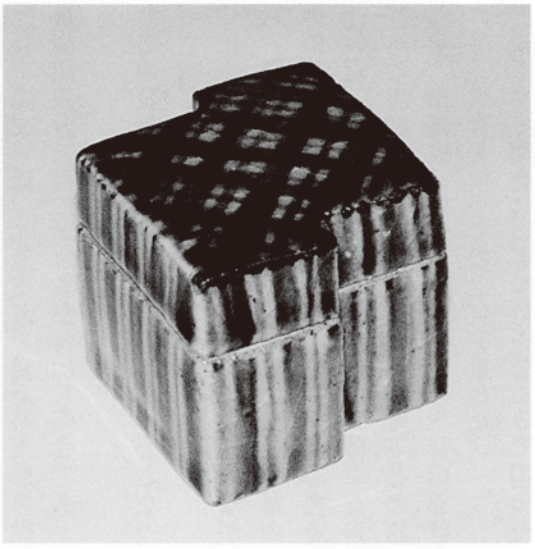
この発会準備には荻野と吉田が中心となって立案し、多くの人達が協力した。

総務の荻野と吉田は一切の責任を負いながら、発会式の規模、予算、来賓、会場、県内外の茶道関係者への連絡等企画調整に心血を注いだ。交渉係をも兼ねた荻野は、即中斎宗匠への出席依頼や山下幹事、不審庵等との諸連絡、市島成一氏への出席依頼と祝辞のお願い等、重責を担っての上京を重ねた。

ようやく開会にこぎつけたところで困った

石痩庵





「ひょうし木香盒」
斎藤三郎作

事がおこった。支部長が決まらないのである。荻野は「支部長は直接茶の湯に関わっていない人がよい」と辞退するし、吉田も「任ではない」と受けないのである。

その結果支部長の席は未定として、当日を迎えることとなった。

発会式は吉田の開会挨拶、荻野の経過説明に続き即中斎宗匠の祝辞と講話、その後各氏の祝辞があり、最後に岑一朗氏の発声で新潟県支部の万歳が三唱され閉会となった。

同門会発会後も荻野は、表千家の宗匠としていかやへ通って来る人々（故清水宗観の高田の弟子達・荻野に指導を受けた直江津の人達）の指導にあたり表千家の普及に尽力した。

■茶会の開催

荻野の茶の湯における功績は後進の指導ばかりでは無く、生前行った多くの茶会により茶人としての名声を残している。

宗観宗匠七回忌追善茶会の開催

昭和二十六年亡き師清水宗観の七回忌追善茶会をいかやに於いて開催し、宗観を偲ぶ多くの人々が列席した。その際引出物として荻野が用意したのが、斎藤三郎（陶斎）の焼く「ひょうし木香盒」である。荻野は香盒の箱に自ら筆を取り「幽石庵閑示斎宗観宗匠七回忌追善茶会記念」と書き付けている。

岡倉天心堂建立記念茶会の席主

大正二年岡倉天心は妙高を望む赤倉山荘で五十二歳の生涯を閉じた。翌三年天心の弟子横山大観、下村観山等により「天心岡倉先生終焉之地」の碑が建てられた。昭和三十三年荏原製作所社長畠山一清氏等により「赤倉天心会」がつくられ、同年八月東京芝の宮本直一氏の働きで「天心堂」が完成した。

宮本氏は天心堂完成に伴う除幕式の茶会を行いたいと考え、畠山一清氏（即翁）五島慶太氏に呼びかけ席持ちを依頼した。しかし、二席では少ないことから、人を介して荻野に席持ちの依頼があった。荻野は随分辞退したが「是非とも」との再三の要請に応じ一席を承諾した。当日は各茶席での茶会開催に先立って、荻野が皆を代表して天心堂の前で献茶を行った。翌年にも再度宮本氏の呼びかけにより天心堂落慶記念茶会が開催され、荻野はこの時も赤倉いかや荘での席主を努めた。これら妙高高原町での荻野等の文化活動が、今日平山郁夫氏を名誉会長とする「岡倉天心妙高高原町顕彰会」が発足する要因となっているのである。



昭和18年新潟県直江津市（現上越市）に生まれる。
茶の湯文化学会会員
上越郷土研究会会員
表千家
著書「上越の茶の湯」
茶道文化学術奨励賞授賞（財団法人 三徳庵 大日本茶道学会顕彰制定）

海西東陸



直江津という名称は、その願いが県令によって却下され「今町」になりそうだったのを再度願い出て、明治十一年十二月二十六日認可され正式名称になったものである。

白銀賢瑞（しろがねけんずい）の名著『直江津町史』によれば、律令制の廃頽にともない「水門（みなと）」の経営が直江の荘（しょう）に移ることによって「直江の浦」になり、鎌倉時代に「直江の津」になったものであろうとし、「直江」の語源は、まっすぐな海岸線を言うのであるといっている。

また「今町」とは、福島城が廃城となって後、関川（荒川）河口の左岸に再び町をおこしたので、新しい町、つまり「今町」になったという説は誤りで、「澗間町（えまちょう）」というべきであって、澗間とは湊のことであり、直江（の）津澗間町がいつしか「澗間町」だけで通用するようになったものであろうと述べている。

これは私見であるが、越後では「い」と「え」が逆になることが多いので、「えま」が「いま」に転じていったのではなかろうか。それにしても直江の津の「の」は、いつ無くなったのであろうか。

以上のことは編纂中の「上越市史」によって科学的な光が当てられることを期待したい。

さて本誌のタイトル「直江の津」は、室町時代に成立したといわれる「さんせう太夫」「婆相天」「義経記」「笈さがし」「まんじゆのまえ」などの物語にしか、その名前が登場しない。作者にとって行政的名称の「越後府中」よりも、万里集九が「梅花無盡蔵」の旅で見た「屋を連ねて塩を焼き、煙はおのずと垣となる」という雑然とした人間くさい「直江の津」のほうがよほど魅力的だったのであろう。物語に共通するのは、東西日本を分ける地として描いていることである。安寿・厨子王が西の船に、母は東（佐渡）の船に売られ、弁慶は「直江の津は北陸道の中途にて……」と言っていることで理解できる。

室町の能作者はこのことを踏まえた上で、もう一つ、直江の津は境界の地、ここから先は異界であり、その淵であるという認識のもとに、直江の津で行われていた人身売買という悲劇を能「婆相天（ばそうてん）」（平成十一年・復曲、十三年・国立能楽堂で再演予定）として創作しているはずである。

直江の津は、西でも東でもない空間と異界への淵という二重構造を持った場であるからこそ、母を二人の子が乗った二艘の船の間にある海へ身を沈めさせ、千手観音をして婆相天を働かしめることができるのである。そのために、作者は「直江の津」と「問（とい）の左衛門」という名のみ残し、全てを捨て去って能へと昇華しているのである。

作曲されて間もなく眠りについた「婆相天」が再び目覚め、鑑賞できるようになったのは喜ばしいかぎりではあるが、いまさら、その登場人物を特定して説明しようとするむきがあるのを聞き及ぶにつけ、我々、今どきの人間の想像力の欠如を思わずにいられないものがある。

（汐）

イラスト『義経記』（直江の津にて笈さがされしこと）
岩波古典文学大系より

路上観察学会というのをご存知でしょうか。東大の藤森先生、イラストライターの南伸坊を中心とする人たちで、街なかの森羅万象すべてに目をむけようという学会なのです。昨年この一行が上越を訪れたという話は聞いており、何をしに来たのか興味はあったのですが、たまたま地図の雑誌と銘うった「ラパン」の冬号を見ていたら「奥の細道ハイカラ記・6回」として、金比羅さん境内の芭蕉の句碑などが載ってるではありませんか。なるほどと思っているところへ、まったく良すぎるタイミングで京都の知人から〈奥の細道 路上観察 新潟・直江津〉というコピーが届いたのです。

藤森先生は、直江津は魚もいいが寺社の彫刻もいい。ある寺の桁材の上の子犬の彫刻が、ちゃんと下をのぞき見るように作られていると、お褒めの言葉があって、つづいて南伸坊が書いているのですが、「京都新聞」（但し写真のアングルが両氏とは多少違うが、編集部において撮影したものである）から転載させていただくことにしました。感想と撮影場所の詮索は、それぞれ読者でどうぞ。

懐かしいネーミング　南 伸坊

「スナック・再会」「バー・黒い瞳」「波止場」。まるで昭和三十年代の歌謡曲か映画のセットの街のような、不思議に懐かしいネーミングの看板が目についた直江津であった。

「哀愁の港町」の「霧降る街角」で「孤独な私」が酒場をハシゴして回っているような気分になる。

冬の海なら荒海が、おそろしい波音と、強風を吹きつけていただろう。

安手のロマンチックには、あなどれない「癒し」の力があるかもしれない。

ト音記号や四分休符や、二分音符や四分音符を散らしたレースのカーテンも、どこかほほえましい夢の中のようだった。

ふと目のはしに「美人にとれる人物写真」と、あまりやかましく考えられていない文案の看板があって、思わずほおがゆるんだ。

直江津は、少なくとも看板に関しては、素直な直球勝負の土地柄であった。

直江津の美人ばかりや霧の中　南方

（2000.11.21付「京都新聞」より）





上 「天井のかわいい番犬」（藤森照信）
下 「美人写真館」（南伸坊）

■読書びと

夢の途上

ラフカディオ・ハーンの生涯【アメリカ編】

工藤 美代子著

集英社刊
二〇〇〇円



ノンフィクション作家工藤美代子は、一九五〇年東京に生まれ、十八歳でチェコスロバキアに留学する。二三歳のとき二度目の結婚相手の住むカナダに移住、彼の地より、日系移民の労働運動家・鈴木悦と彼を追って海を渡った作家田村俊子の評伝『晩香坡の愛』第一次大戦時の日系カナダ義勇兵の記録『黄色い兵士たち』一枚の見合い写真で北米へ嫁いで行った明治の女達の聞き書『写真婚』等々を日本へ向けて発信する。

九三年離婚して帰国（同時に再々婚）、以後は守備範囲を広げ、安藤昌益研究家の外交官ハーバート・ノーマンの軌跡から、近刊では良子皇后伝までを表わす。処女作以来の読者として少々ほろ苦い思いを感じながら、テレビで北野大と一緒に庶民派コメンテーターとして出演する姿を見せられたりもする。

晩秋、細君と八海山麓へ車を走らせ、池田記念美術館にて〈接点―小泉八雲と會津八一〉と題された資料展を見た。「若き日の八一は、最晩年の八雲が教鞭を取った早稲田大学で英文学の講義を受け、師の死後も遺児たちの家庭教師をつとめるなど、小泉家の人びとと親しく交流しました」と解説される展示は工藤の父、池田恒雄の生涯を懸けたコレクションに拠る。八一に愛された三男の画家小泉清の油絵が、両者を囲む芸術の狂気を伝えていた。

工藤は昨年刊行した『野の人 會津八一』で破天荒なる、書と歌と東洋美術研究の一生を様々に織り上げる。一方で、生き方の下手な師を支えきった弟子たちの夢想が呼んだ伝説、長谷川時雨の『美人伝』に登場する画家亀高文子との相思相愛説、を新証言に拠り明瞭な誤謬、八一の一方的な横恋慕と断じている。そして同時に漂泊の孤独とひきかえに、この国の神と佛に愛された二人の男を見つめるのだ。

工藤がライフワークとして書き継いでいるハーン伝の一冊として一九九七年に上梓されたこの本は、「一人の男の人生に、どうしようもなく関わってしまう女というのがいる。」と書き出され、ハーンの最初の伝記を表し、彼の書簡集も編纂した美貌のジャーナリスト、エリザベス・ビスランドの足跡を追う構成となっている。工藤は、彼の才能をいち早く見いだし、終生相談相手として信頼されていたビスランドが「その伝記からほぼ完全に自分の姿を消し去」ったその行動に直感的な重みを感じ、ハーンが一生涯恋い焦がれた彼女のその謎を解く為、南北戦争の記憶をとどめる町からニューヨークの墓地まで精力的な踏査を行う。

生涯日本語を解さなかった八雲の心のレンズが、常にビスランドとの微妙なバランスのうえに開かれて、今は読まれることの少ない作品が生まれていったことが示される。

そして工藤の視線は、八雲の原風景……彼の生まれたレフカディア島、四歳で生き別れた母ローザの故郷、そして彼女が晩年の十年を精神病院で暮した島々にひろがるギリシアの海と、『怪談』の遠い背景、幼少年期を過した父の国アイルランドに向けられる。

徹底的な現地取材と資料の読み込みを重ね『精霊の島―ラフカディオ・ハーンの生涯へヨーロッパ編〉』を続編として送り出している。

工藤はいつの時代のどんな場所でも、男が女を追い、女は男と向合いながら、それより他に両性の自立の拠点はないことを、最前線に立ち続ける仕事の質と、日常の暮しの在りようで見事に受け止めていく。

東京下町生まれの母工藤ハツエの生き方に、幼く別居した父の熱い影響力を縒りあわせて勁く、そして笑顔の可愛いこの女人が書き紡ぐ貌々との出会いに期待したい。（S）

見る目

神饌箱

かつて府中八幡宮の神職をつかさどった渡辺家に伝来した神饌箱である（写真1）。いい伝えでは、慶長三（一五九八）年に上杉景勝にかわって越後大守となった堀氏が府中八幡宮に奉納したものとされている。

印籠蓋造りのやや小振りなこの箱の特色は、なんといってもその斬新な意匠にあろう。小箱全体を片身替に鋭敏な感覚で区切り、一方を梨地とし、他方を黒漆塗として金と黒にわける。平蒔絵で、梨地には牡丹、黒漆地には菊の折枝をアクセントにおき、丸輪に梅鉢をあしらった堀の家紋を全面に散らしている。ふかく沈んだ漆黒の背景から、きらびやかな家紋が表面に浮きでるような効果が得られている。金と黒の対比の妙とともに、雷光形の直線的な構図に対して、梅鉢文の曲線と不規則な配置は、対称を意識的にデザインしたものといえよう。

こうした意匠は、いわゆる高台寺蒔絵による装飾をさす。太閤豊臣秀吉の夫人、北政所（おね）が夫の菩提をとむらうため、京都東山に建立した寺院に由来する名だが、桃山時代、秀吉を頂点とする武将たちの周辺をかざった調度類の蒔絵が総称して、後世こうよばれたのである。すなわち、この高台寺蒔絵の神饌箱こそ、堀の美意識を端的にあらわした遺品といえよう。

堀は、秀吉政権下にあって重用され、豊臣大名として越後に入封する。新しい領主として、上杉からの「旧来」を継承し、府中八幡宮を保護したと考えられるが、このような最先端の意匠をほどこした神饌箱を奉納することで、自身の権威を誇示したのではないだろうか。

ここに、堀が蒔絵を愛好したことをうかがえる一通の興味深い書状がある（写真2）。この書状は、堀の重臣として執政にあたった堀監物直政が「ぬし（塗師）刑部」に宛てて、「木地」のままの「鞍」に「まきゑ」（蒔絵）の装飾をほどこすよう依頼したものである。直政は、「金かい」（金の薄板）の技法をとりいれさせ、金づくしの意匠の鞍を注文している。書写年代が記されていないので、春日山城時代の書状なのか、福島城を築いてからのものなのかは不明だが、府中に蒔絵の技術をもった制作工房のあったことが知られる。すると、越後府中にあって、京の絢爛豪華な文化がそのまま直輸入されていたことを、この文面は物語っている。直政がつくらせた鞍の美しさは、現存しないので知るよしもないが、神饌箱の意匠からその華麗さが想像できよう。

神饌箱は、神にささげた美術工芸として優れているのみならず、今はない越後府中の栄華を伝える貴重な文化財である。

28ページの写真は、五智国分寺三重塔・モナリザカメラ店

編集室から

今号は多少文化面に比重を置きすぎた感は否めないが、次号以降、経済面の企画も立ち上げているので、お待ちいただきたい。本誌は、斎京信金理事長の提唱する「直江津学」への試みと、

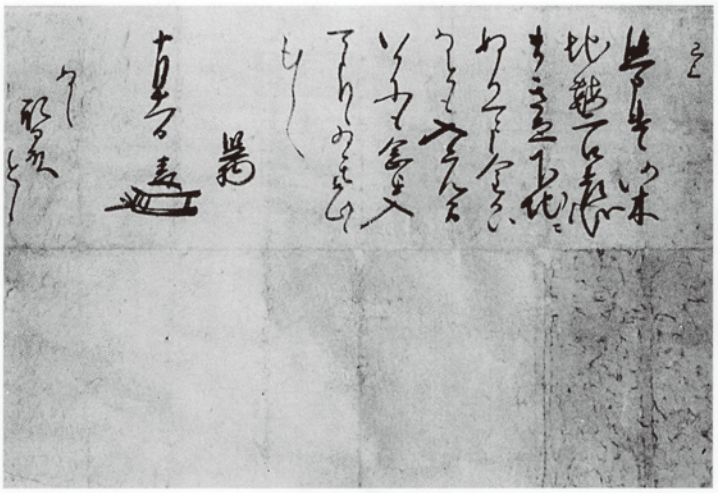


写真２（上越市武藤家蔵）

已上

態申遣候　仍本
地鞍二口差越
まきゑ下地ニ
ぬり可申金かい
なども入候間
いかにも念を入
可下候　為其此如候
謹言

監物
十月十一日　直政（花押）
ぬし
刑部殿
進上

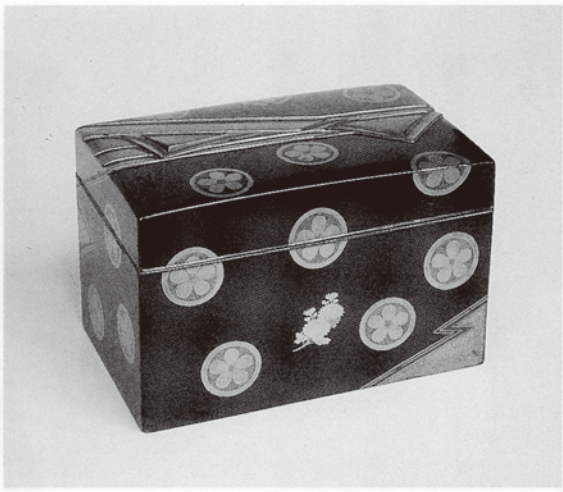




写真１

●上越市指定有形文化財
種　別　工芸品
名　称　神饌箱
指　定　昭和59年12月24日
所在地　西本町３丁目６番４号
所有者　渡辺蓮寿
大きさ　縦12.8㎝　横20㎝　高12.6㎝

■中西聰（なかにしさとし）・上越市学芸員■

わずか三十ページあまりの雑誌ではあるが、「総合誌」という側面を持ち、そのなかで中村、平丸両氏にご寄稿いただいた。また、高嶋先生には限られた紙面でまことに申しわけなかったが「老いること」という、今もっとも直面せざるを得ない問題でありながら、じつは人が生きるということの根源をお書きいただいたような気がする。

本誌は、閉ざされた雑誌ではなく、その扉は広く読者に開かれている。読者の参加がこれからの本誌を支えてくれるはずである。多くの投稿、提言、感想をいただきたい（但し、掲載については、編集委員会において多少の審査があることをご了解願いたい）。

ともあれ、一年近い構想期間を経ての誕生である。

投稿・内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五五（四三）九七一五
FAX〇二五五（四三）二〇二五
E MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

「直江の津」（季刊・第一号）
発行日／平成十三年三月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市東町一－三
直振興業内
☎〇二五五（四五）〇二〇二
発行者／直江津信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

季刊

直江の津



発行／平成十三年三月二十日■発行所／直江津経済文化研究会■発行者／直江津信金倶楽部■編集協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円